

平成26年度「ふれあい陶芸教室」報告

ふれあい陶芸教室から学んだこと。陶芸館の可能性

岩渕 寛

(愛知県陶磁美術館 陶芸指導員)

IWABUCHI Kan

人は粘土を手にするると、無意識に丸めてみたり、つぶしてみたり、手の中や指先でほとんどの人が抵抗なく何らかの「かたち」をつくってしまうものである。その感触や、「かたち」が変化することを認識すると、より丸くしてみたり、なんらかの具象物をつくり始めたりするものではないか。私自身、粘土とのかかわりで一番古い記憶では、河川の土手に粘土層が露出した部分があり、その粘土を玉にして手に取り、護岸工事された対岸に投げつけると、様々な「かたち」に変形し付着するのを楽しんだことを思い出す。その時も、何度か投げつけることにより粘土の量を調節し始め、投げつける粘土玉の形状を変えたり、重なるように投げつけたりと意識的に「かたち」の変化を認識したうえでの遊びであったことが思い返される。粘土は、外側からの圧力によっていとも簡単に様々な「かたち」に変化をする。その現象が人の創作意識を刺激し、何かをつくりたいという気持ちを駆り立てる魅力的な存在なのである。

当館では、毎月第三日曜日を陶芸ふれあい体験日とし「ふれあい陶芸教室」を行っている。平成26年度は、あなたとわたしとわたしたち～陶芸家といっしょにつくる～を合言葉に偶数月は「こま犬」奇数月は「季節の時候」をテーマに近隣の窯業地から経歴や作風の異なる、主に土の素材感を活かした作品を制作する陶芸家を講師に招き実施した。特に「こま犬」づくりは、講師それぞれの立場から「こま犬」を見つめなおし、その内容を講師、参加者が共有し、同じ空間、時間の中で、その時にしか生まれない魅力的なこま犬づくりが行われた。結果として、各回講師の特徴が顕著に表れた様々な表情や動きを持った「こま犬」が生み出され、会を増すごとに参加者も増加し、ふれあい陶芸教室の「こま犬」づくりは陶芸館の重要な催事の一つとして成長し続けている。

しかし、ここでは「こま犬」づくり以外で行われた「季節の時候」をテーマとした奇数月の加藤圭史とつくる「秋の恵みを盛るうつわ」、寺田鉄平とつくる「冬の恵みを盛るうつわ」をあえて取り上げ、『人と粘土、そしてやきもの』という視点でその回の出来事を振り返ってみることとした。

「ふれあい陶芸教室」は参加者へ事前に行う情報提供をできるだけ控えて、「こま犬」や「たねをいれるうつわ」などタイトルと担当する講師のみを広報し実施している。何をつくるかはタイトルから想像する範囲にとどまるため、それぞれの認識が違うまま参加者は来館することになる。事前に詳しい内容を公表しないことによって、講師の考えをクリアな状態で参加者に伝えることができ、その時間を共有しやすくする試みである。

その中でも加藤圭史とつくる「秋の恵みを盛るうつわ」では、加藤圭史氏は制作を始めてからもその日何を制作するかを詳しく参加者に説明することを行わなかった。机に置かれた約60キログラムの粘土を同席した人で協力し、机いっぱいには伸ばして板をつくりましょうと伝えるにとどめたのである。あえてなのか、忘れていたのか。結果として、講師、スタッフの想像を超えた参加者の粘土へのアプローチが行われることになった。

参加者はその掌で、または拳で塊状の粘土を全力でたたき、木片、麺棒、角材、軍手など用意された簡素な道具を駆使し、協力し合いながら体全体を使って机上いっぱいには伸ばしていく。この時点で、作為はまったく感じられず、ただひたすら粘土を伸ばすことだけに集中している。叩かれ、のばされていく粘土は端々がちぎれ、厚みも不均等。叩かれ、のばされることによって生まれた粘土特有の表情、様々な道具や軍手の跡などの痕跡を含みながら、次第に「やきもの」として成り立つ範囲の厚みを持った大きな板に姿を変えていった。参加者は全力で粘土を叩く。誰もが真剣に、しかもみんないい表情をしている。おもいきり粘土を叩く。たのしそう。そんな中、何人かの参加者は粘土に残っていく表情に興味を抱く。幼少時の私の記憶のように、意識的に「かたち」の変化を認識し、打ちつける手の強さに強弱を付けたり、粘土に残る痕跡を作為的に「文様」として扱ったりしていく。しかし、ここで圭史氏とわれわれスタッフは次の一手に出る。成形後の板の変形を考慮し、おおかた均一に伸ばされた板を協力して裏返し、反対側の面を同じように叩くことを伝える。「作為的」になりかけた参加者の意識を裏切ってみる。少しずつ「かたち」の意識を持ちながら大切に伸ばしてきた自分の目の前の板が、ひっくり返されてつぶされてしまう。しかも、大きな板なので、ひっくり返す際にちぎれたり、破れたり重なって分厚くなったりする。その結果、様々な表情が絡み合い、延ばされ、叩かれ、また新たな痕跡が残されていく。一枚の板に戻される頃には、まるで抽象絵画のような表情が重なり合い、濃密な表情の奥行きを導き出したことは想像できるであろう。

出来上がった粘土の板を観察してみる。おもしろい。やきものとして「焼く」ことを意識しないで、みんなで板をつくる事だけを考え、粘土に接した参加者たちの痕跡が、圭史氏、スタッフの想像を超えたものとして出来上がった。まるで、ジャクソン・ポロックが描いたアクションペインティングによる絵画のようであった。粘土という範囲を超え、机

上という制限はあるものの、周りの空間すら取り込んでしまうようなオールオーバーな表現がそこには存在していた。ここまでは『人と粘土』の関わりから生まれた結果である。しかし、次の展開、この板を「やきもの」にする段階で様々な課題が浮き彫りになることになる。

この回のテーマは「秋の恵みを盛るうつわ」ということで、参加者、講師一同で陶芸館を飛び出し、制作した板に「秋」の要素を盛り込むために木の実や、枝、落ち葉など自然物を採取に出かけた。採取した「秋」の要素を板に押し付け印花のように跡を残す予定である。この時点で、何人かのスタッフ、講師ともに「はたして要素の追加は必要なのか？」とおもったはずである。だれもが、出来上がった板に何らかの健康的な美しさや、表情の濃度の濃さを感じ取っていた。しかし、「予定」や「秋」という言葉に縛られて、一番美しい瞬間を逃してしまうことになってしまう。足りないところに要素を追加するのは難しいことではないが、濃密な表情が混在する中に新たな「秋」という要素を追加するのは非常に困難なことである。しかし、参加者は純粋に「秋」の痕跡を残す思考になっているため、板をつくるときにできた表情や痕跡の美しさは見えにくくなってしまい、結果としてその面を慣らしたり、避けたりして「秋」を押し付けることになってしまう。このあたりで圭史氏は予定の「うつわ」にするために、この板を任意に切り取り板皿にすることを参加者に伝える。(いつ伝えたかは定かではないが) すなわち、やきものとして「焼く」ことができる形にする段階にはいったのである。このことにより、参加者は「皿」講師とわたしたちは、やきものとして「焼く」という言葉に縛り付けられることになる。

参加者は個々に、「皿」を大きな板からトリミングして、切り出していく。すでにこの時には机の外の空間まで取り込んでいた「かたち」や「表情」は「皿」という限定された空間に小さく閉じこめられていく。その切り取られた空間の中で、さらに「皿」という言葉が持つイメージの中での「作業」が進められていったのである。切り取られた板は、「皿」に加工されていく。板の端々に見えた粘土が見せるひびや、皺、複雑に入り組んだ北欧の入り江のような口辺は押さえられ、整えられていく。「食器」としての用途なども加味され、表面の凹凸は慣らされ、新たに紐状の粘土で鉢のように立ち上げられていくものも見受けられた。板をみんなで作り上げる時点で体感し、無意識に作られた自然な粘土の持つ美しい表情。「皿」という既成概念によってまきにつぶされていくこととなった。しかし、これを否定するわけではない。これが素直な参加者の反応で、一般の人々が描く陶芸教室での「やきもの」制作の実態なのである。また、圭史氏や私たちも、「予定」であったやきものとして「焼く」ことができる形として完結させる部分で、参加者をうまく導くことができなかったのである。この結果は、私の中で課題として残り、約半年後の寺田鉄平とつくる「冬の恵みを盛るうつわ」のなかで『人と粘土、そしてやきもの』をつなぐ一つの答えを生むこととなる。

1月の回は「冬の恵みを盛るうつわ」というテーマで、講師に寺田鉄平氏を迎え行われた。鉄平氏はふだんから土の表情を活かした作品作りに取り組んでいる作家である。打ち合わせの際に実際に制作風景を見学し、鉄平氏の言葉と動きをみて、圭史氏の回のもやもやが一気に晴れた気分になった。

鉄平氏が始めたのはまず、「底」をつくることであった。これもまた、鉄平氏の純粋な行為だと感じた。「おいしいものを盛るうつわを作しましょう」わかりやすく、実にストレートであった。やきものづくりにおいて「底」は非常に重要な過程である。底の広さ形状により、出来上がる形や大きさがある程度決定されるからである。さらに、乾燥時、焼成時の形状の維持のためにも重要な役割を果たす。簡単に言うと、これから何をつくるかの自分への強い意思表示なのである。「おいしいものを盛るうつわをつくる」これも、制作過程はどうであれ、最終的な目標を定めた自分への意思表示である。そのうえで、鉄平氏の土の表情を活かした制作に参加者は集中できるのではないかと直感した。作りやすい大きさで様々な粘土の板を作り、参加者全員の板を一同に並べる。その中から気に入った板を選択し、「底」の上に立ち上げていく手法を鉄平氏と私たちは採用することとした。

開催日当日は、鉄平氏がある程度のデモンストレーションを行った。大切な部分である「底」の制作、うつわを作る段階での「底」からの粘土の立ち上げ方を丁寧に説明した。その後、手に取れるくらいの粘土を板状にし、手をつぶしたり、指の腹で引っ掻いたり、板切れなどを押し当てて様々な板状の「破片」「帯」をつくりあらかじめ制作した「底」に接着し立ち上げ、筒状に巻き付け底に引っ付けていく制作を簡単に行った。参加者は思い思いに様々な表情を見つけた板をどんどん制作していった。机上に並べ、ほかの参加者と交換なども幾人かの間では行われた。自分が制作した板は、誰でも愛おしいもので、交換まで至らなかったのが事実だが、圭史氏の回のように、粘土特有の表情を持った板片がたくさんつくられた。ただ、単位が小さいため、簡単に制作ができ、意図的に表情に強弱を付けたりと、参加者はいろいろな表情を見つけていった。底を基準に様々な帯を立ち上げていくのだが、足りない個所は足す、または伸ばす、穴が開いたままにするなど様々な感覚による制作過程が見られた。泥漿を塗り付けて帯や粘土片をくっつけていくだけなので、様々な表情を保ったままで容易にうつわ状の形態を作ることができた。これは、やきものとして「焼く」ことができる形である。厚さもある程度均一に仕上げることができ、底があるために強度も高い。安定した形状を簡単に制作することができたのである。これは鉄平氏のふだんの制作からくる経験によって導き出された結果である。ここに『人と粘土、そしてやきもの』の一つの答えが少し見えたような気がしている。しかし、圭史氏との体験がなければ、鉄平氏と私たちが導けなかったかもしれない。

このふれあい陶芸教室での経験は、今後の陶芸館でのワークショップや、作陶体験の考え方を問い直す一つのきっかけになると確信する。粘土を使ったワークショップは、やきものとして「焼く」過程を行わなければどこでもできる催しかもしれない。一方で、現在の陶芸館では自由という文句の元、作り方の説明をし、狭い制作方法の中でやきものつくりを「体験」することを行っている。圭史氏が行った板をつくる行為の中に見つけた粘土の可能性、鉄平氏の示したやきものとして「焼く」ことができる形の重要性。その両者を併せ持つ、やきものを「焼く」ことができる陶芸館ならではの企画とはなんなのか、考えていかなければならないと感じている。やきもの制作を断片的に、粘土、制作、装飾、焼成といった具合にそれぞれに分けてもその行為一つ一つが魅力のあるものなので、かなり内容の濃い企画が考えられる。細分化すると、深く追及することになり、今まで気がつかなかったことに気付く可能性は高い。しかし、すでに私たちには、粘土で作上げたものをやきものとしてやきあげる知識と技術がある。『人と粘土、そしてやきもの』というテーマの下、人が粘土に触れた時の感動を、「やきもの」としてそのまま残して帰れるようにどう導いていくのか、常に考えていきたいと思う。



加藤圭史とつくる「秋の恵みを盛るうつわ」



寺田鉄平とつくる
「冬の恵みを盛るうつわ」